

最後の過越祭(マルコ 14:22-25)

私たちは神様の恵みにより救われて信者になりました。そのようにせつかく信者になったにもかかわらず、多くの方が過去に囚われて苦しんでいます。また、現実のさまざまな問題に倒れて、結果、未来に対して不安な思いをすることになります。なぜ信者なのにそのように無気力になり、この世を生かすべきなのになかなかそこまでいけないのでしょうか。それは実はいまだに自分自身に囚われて、また目に見えるもの(聖書はそれを肉と言います)に囚われて、この世のものに囚われて、自分に左右され、目に見えるものに左右され、この世に左右されているからなのです。今日の聖書を見ますと、イエス様がこの地上での最後の過越祭を守られる場面が紹介されています。その最後の過越祭には、それこそ先ほど申し上げました信者なのにどうすることもできない限界に勝てるメッセージが込められています。イエス様が最後の晩餐、最後の過越祭を守るときにパンを裂いて弟子たちに与えながら「これはあなたがたのためのわたしの肉なんだ」。ぶどうの杯を与えながら「これはあなたがたのために流すわたしの契約の血なんだ。これを飲んで、また食べなさい」とおっしゃいました。それがいまの教会の聖餐式につながるようになったものです。最後の過越祭、それこそイエス様ご自身のことを示すための契約の預言ではありますが、もう間もなくイエス様が十字架で死なれることになるので、これがイエス様が地上で守られる最後の過越祭であり、また弟子たちにとっても結局、最期の過越祭になります。その後は聖餐式に変わります。この最後の過越祭を通してどのようなメッセージを私たちに語っていらっしゃるのでしょうか。

1. 「イエス様が血を流されてからだを引き裂かれたのは私のため」と告白すると、のろい(過去)から完全に解放される。

そのまず第一は、「イエス様が血を流されてからだを引き裂かれたのは私のため」と告白すると、自分でも気づいていなかったでしょうけれども、そして分かったとしてもどうにもならないのろいから完全に解放されます。言葉を変えますと、キリスト以前の過去から完全に解放されます。

イエス様がおっしゃいました。これは「多くの人の為に」とおっしゃいました。

1) 出エジプト

この過越祭の起源は、イスラエルの民がエジプトで 400 年以上、奴隷の生活をしている時に、神様がモーセを送って羊の血を門柱に塗ったところは死の天使がそこを過越たということで過越の祭りが始まりました。つまり、どうにもならない 400 年間の奴隷の生活から解放されるということが過越祭の一番の核心ポイントです。

2) 絶対不可能なのろい(大小、程度ではなく根っこ-エペソ 2:1-3)

しかし、エジプトでの奴隷の生活が問題ではなくて、それは人間が神様を離れて以来、実は人間の力ではどうにもならない絶対解決不可能なのろいの運命に囚われているということを示すための内容なのです。私たちが過去を振り返ってみますと、さまざまなことがそれぞれの人にありました。それは大きな不幸もあるし、そんな大したことではないと思われることもあります。またひどいなと思うこともあるし、そこまで思うことでもないなという軽いものもあるかもしれません。大小の問題、程度の問題、いろいろ違うでしょうが、それが問題ではありません。その根っこのほうに誰も気づいていない人間の絶対解決不可能な滅びののろいの運命を抱えているわけです。そこから解放されない限り、その人の人生は幸せとは無縁なものになり、また勝利などは考えられないし、自分で頑張って成功したとしても、それは成功になりません。誰もその人間の実像、真相が分かっていないがゆえに、こうすればこうなるだろう。ああすればああなるだろうというふうに皆が思っていますが、実は人はそういう存在ではありません。聖書だけがそれを私たちに教えています。出エジプト前の 400 年の奴隷の生活というのは、私たちのことを指してそれを示すための内容でした。聖書はどのような不幸があったのか、あるいはその人がハッピーだったのかは一切関係なく、このように私たちの根っこのことを語っています。エペソ 2:1-3 です。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者とし

て今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」。認めたくないでしょう。けれどもこれが真実なのです。これを知らないで「なんで私にはこんなに理不尽なことがあったのか」「なぜこんなにいじめられるのか」「なぜ私にはあの人のようなひどい問題がないのか」等々、比較しながら皆が生きています。どれほど大きな問題なのか、小さい問題なのか、それに囚われる理由などは実はありません。根っこの方、根本にこのような絶対解決不可能な運命を抱えて生まれてくるものなのです。

3) 血と肉(身代わりとしてのろわれた)イザヤ 53:6、ガラテヤ 3:13

イエス様がご自分の血を流されて肉が引き裂かれたということは、絶対解決不可能な滅びの運命に囚われてる罪人の私たちの身代わりとしてのろわれたという意味がそこにはあるわけです。罪のないイエス様がなぜ血を流されてからだを引き裂かれなければいけないのでしょうか。生まれながら神の御怒りを受けるしかない私たちの身代わりとしてのろわれたからそういうことがあるわけです。聖書はそのことをこのように私たちに語っています。イザヤ 53:6には「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら「木にかけられる者はすべてのろわれたものである」と書いてあるからです」。皆さん、イエス様がなぜ血を流されてそのからだを引き裂かれたのか。なぜなのでしょう。真剣に考えたことがあるのでしょうか。ただ漠然としてありがたいと思って信仰生活を送っていらっしゃるのでしょうか。なのでこのイエス・キリストが血を流されてからだを引き裂かれた。イエス様が私の身代わりとしてのろわれた。私は罪のないイエス様が身代わりとしてのろわれなければ希望のないものなんだということに気づかなければなりません。

4) ローマ 8:1-2、ヨハネ 5:24

イエス様が私のために血を流されて、私のためにからだを引き裂かれたと心から分かって告白するときに、ローマ 8:1-2「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」。私たちをエジプトの奴隷ではなくて、死と罪の原理から、その地獄の運命から解放するためにイエス・キリストが血を流されました。そのからだは引き裂かれました。私のためというのは、私がそれがないといけない罪人なんだということを知ることであります。ヨハネ 5:24「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」。そのことのためにイエス・キリストが十字架で血を流されてからだを引き裂かれたわけです。イエス・キリストの血、イエス・キリストの肉は私のためなんだとその人が心から告白するときに、この解放の祝福がその人のものになります。

5) ヨハネ 19:30、I ヨハネ 3:8

イエス・キリストは十字架の上で宣言されました。ヨハネ 19:30「イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった」。私たちをこの死と罪の奴隷から、滅びの地獄の運命の奴隷から単純に解放される救いの働きを完了されたわけです。イエス様が完了なされた十字架の血と肉が私のためだったと告白するときに、この解放の祝福はその人のものになります。何を完了されたのでしょうか。I ヨハネ 3:8「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」。私たちは今までの慣れがあるので、道徳的に倫理的に常識的な話の流れに乗りたいという気持ちはあるかもしれませんが、そうすると聖書の話はまったく私とは無関係の無縁の話になります。教会に通っていても、聖書が神様が私たちのために語ろうとしていらっしゃるメッセージと私とは関係ないことになって空回りしてしまいます。聖書はそういう話ではありません。いま私たちが確認した通りに自分で気づいていないでしょうけれども、それを無知と言います。自分でいくら努力していくら頑張ってもどうにもならない、人がいくら愛情を注いでも、社会福祉制度がどれほどきちんと整備されたとしても解決できない霊的な問題があり、根本的な問題を抱えて生まれてくる者なのです。誰がでしょうか。すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない。だからイエス・キリストは私たちの身代わりとして十字架で血を流され、からだを引き裂かれました。そのことを示すために、教えるために定められた制度が過越祭だったわけです。その主人公は今、

最後の晩餐を守っていらっしゃるイエス様ご自身だったわけです。イエス様がすべての人のためにわたしが流される血とおっしゃいました。それから、この最後の晩餐の特徴、過越祭の特徴は何かと言いますと、イエス様の血とイエス様のからだを象徴するぶどう液とパンを食べて飲むことなのです。自分の中に取り入れるということですね。今日の聖書にも彼らはこれを飲んだと言われています。なので、最後の過越祭を通して、限界にぶつかってアップアップするしかないクリスチャンの私たちに語っていらっしゃるメッセージは何かと言いますと二番目です。

2. 「イエス様は私の中に宿っておられる」と告白するすると、どんなに厳しい現実にも打ち勝って、希望の未来に向かえる。

この「十字架で血を流されてからだを引き裂かれることによってすべてを完了なさったイエス様は、いま私の中に宿っておられます」と告白する信者は、どんなに厳しい現実にも打ち勝って、それに囚われることなく希望の未来に向かうことができるようになります。

先ほど申しあげました現実に囚われて未来を不安に思うということはクリスチャンに望ましい気持ちではありません。そうならざるを得ないさまざまな事情があることは充分理解できます。しかし、それが当たり前で正解と思っはけません。それはイエス・キリストのことを分かっていない裏返しのようなものなのです。私は自分の何かで生きるものではなくて、それでは限界だらけでうまくいくはずがないので、イエス・キリストが十字架で死なれて、すべてを完了なさったイエス・キリストが復活なさって、信じる私たちの内側に入って宿られることになりました。それでなければいくら強い人間でも倒れるしかありません。それが霊の世界なのです。目に見えることがすべてではありません。過越祭、聖餐式を通して語っていらっしゃるメッセージをもう一度申し上げます。イエス様が私の中に宿っておられます。それを素直に心から喜んで告白できるものは、現実にとどのような問題があろうがそれに打ち勝って、そして希望の未来に向かって歩むことができるようになります。

1) ヨハネ 6:53-58、ガラテヤ 2:20、I コリント 3:16

イエス様がヨハネ 6 : 53 においてこのようにおっしゃいました。「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません」。56 節には「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります」。イエス・キリストの血と肉を飲み食いすることは、イエス・キリストと一つになる神秘的な祝福なのです。信仰というのは、日曜日に教会に通うことではありません。単に聖書の学びをする宗教の行為ではありません。滅びるしかなかった私たちが、神様を離れて目に見えない空中の権威を持つ悪魔サタンに捕らわれていた私たちが、地獄の運命を抱えていた私たちが、神の恵みによりキリストが代わりに血を流してからだを引き裂かれることによって、そのキリストを受け入れることで神のかたちを回復し永遠のいのちが与えられキリストと一体となる、キリストのからだなる教会と言われるのではないのでしょうか。それが救われたということであり、神の子どもになったという意味なのです。その人がどのような過去を生きてきたのか、今現在どういう社会的な地位、また財産をどれくらい持っていて、どのような実力があるのかなどの程度はまったく関係ありません。誰でもキリスト・イエスのうちにあるものは、古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなりました。そのことを聖餐式を通して語っていらっしゃるわけです。だからパウロもこのように告白しています。ガラテヤ 2 : 20 「私はキリストとともに十字架につけられました」。自分で自分と思っているもの、それは十字架とともに死んだわけです。「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」。これは抽象的な気持ちの問題ではなくて事実なのです。目に見えないだけであって、触って感じることはないだけであって事実なのです。「いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」。だからパウロはイエス・キリストを信じている信者のことをこのように言及しています。I コリント 3 : 16、あなたがたは聖霊が宿っている神の神殿であることが分かっていないのか。神殿は王様が住んでから宮殿と呼ばれます。その建物が立派なのか、しょぼいのかなどは関係ありません。中身が何かによって名前が決められます。神殿は神ご自身が住んでいらっしゃるから神殿と言われるわけです。聖霊を通してキリストが三位一体の神様が私の内側に住まわれるわけです。それが救われたということなのです。

2) II コリント 4:7-9、ローマ 8:29、35-37

なので、そのことを本当に信じて告白して、それがメインになって、それが喜びになり、それを味わうことができれば、パウロのように告白することができます。II コリント 4:7-9。よく聞いて考えてみてください。「私たちは、この宝を、土の器の中に入れていたのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。私たちは、四方八方から苦しめられますが」、これが現実なのです。「窮することはありません。途方にくれています」、これが現実なのです。「行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」。なぜでしょうか。私の内側に宝のキリストがいらっしゃるから。誰がなのでしょう。土の器としか言えないような私の内側に。皆さん、自分がどうのこうのに囚われる理由などありません。それは昔の話、キリスト以前のストーリーなのです。誰でもキリストのうちにあるものは指を指されていたザアカイのような人間であれ、現場で姦淫の罪を犯して石打ちにされ殺されかけていたその女の人であれ関係ありません。キリスト・イエスのうちにあるものは、キリストが内にいらっしゃることで土の器がどうのこうのは関係ありません。キリストに集中しましょう。皆さんのために滅びの地獄の運命から解放するために、ご自分の血を流されてからだを引き裂かれていた、すべてを完了なさって完璧に勝利なさったキリストであるイエス様が、皆さんの内側に宿っていらっしゃいます。それ以上、何が望みでしょうか。それ以上、どこに幸せを求めるのでしょうか。それこそが喜びであり、力であり、幸せです。パウロはキリスト・イエスが私の知恵であり、力であり、私のすべてなんだと告白しています。だからパウロは四方八方から苦しめられても一切問題になりません。多くのクリスチャンが教会に行き行って礼拝を捧げお祈りを捧げながら問題がないように、問題がなくなるように、そればかり祈っています。神社とどこが違うのでしょうか。聖書の話と全くかみ合わないのではないのでしょうか。根本的に基本から信仰そのものを誤解しているからです。信者という救われた自分自身がどんな存在なのか、アイデンティティがまだ明らかに明確になっていないからです。環境がどうのこうの、自分がどうのこうの、そこから自由にならないといけません。ローマの手紙を見ますと、ローマ 8:29 にこう書いてあります。「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです」。イエス・キリストを信じて救われたというのは、イエス様と同じかたちに造り変えられることなんだと。一番最初、神様が人を造られたときに、ほかの被造物、動物、犬や猫とは違って、神のかたちに造られました。それは神様と似た存在、神のすべてがその人を通して現れる特別な神聖な存在という意味なのです。しかし、罪によってそのすべてを奪われた私たちがキリスト・イエスを信じることによって、イエス様と同じかたちに造り変えられると聖書は語っているのではないのでしょうか。イエス様を信じている皆さんが、成績が悪いかどうか、健康なのか病弱なのか以前に、イエス様のかたちを回復して、イエス様と似た者になっているということに興奮しなければなりません。そういう存在だからこそ、これはイエス様の内側に宿するという意味なのです。これが聖書が言っているいのちというわけです。そのときのいのちはひらがなのいのちです。だからこそパウロはローマ 8:35-37 でこのように言っています。「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛して下さった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです」。これはいばることではありません。現実にはさまざまな問題があり、場合によっては耐えがたい迫害に会う場合もありますが、私の内側に宝のキリストがいらっしゃる限り、私がイエス様がともにおられるイエス様のかたちに造り変えられている以上、それに十分に打ち勝つ圧倒的な勝利者となると聖書は宣言しています。だから、どのような現実があろうが、どういう問題が目の前に現れようが、クリスチャンはそれに負けません。負けてはいけません。何も思い煩わないでと言われているのではないのでしょうか。何も心配しないように。なぜなのでしょう。心配するしかないことだらけなのに、なぜそう言われるのでしょうか。私も最初、クリスチャンになったばかりの時には理解できませんでした。今までの慣れ、今までの体質というものがあったので。この霊的な事実や奥義などがよく分かっていなかったのです。救われた喜びはあったのですが、その奥義に対してはまだまだ不十分だったので。キリストがすべてを完了なさったと宣言され、悪魔の頭を踏み砕いて勝利なさったそのキリストが私の内側に入って宿っていらっしゃることで、私は全く新しい存在に造り変えられることになります。死んでいた私たちにいのちが与えられることになります。なので、どのような現実があっても十分に打ち勝てるし、だからそれに囚われてアップアップしないで、一歩前を見て希望の未来に向かうことができるようになります。ヨセフは家庭内のいじめ、腹違いの兄達にいじめられてる時

に、そのいじめをどうにかしようとか、なんでこういうことが起こるのかに囚われていないで、キリストの内にある者なので前を見て、世界福音化の夢を見ていました。病気にかかったときも、この病気をどうにかではなくて、その病気を通して次に神様がなさることは何か、そこに目を留めることになります。なぜなのでしょう。すべて完了したから。そのキリストが私の内側にいらっしゃるので。力があなたにあるのではなくて、神様にあることをあなたに示すためにと言われていました。だから、堂々と自分と自分の人生に対してこのように宣言することができます。

3) エペソ 1:3>使徒 1:7-8

現実がどうであろうが、パウロは刑務所の中で宣言しました。エペソ 1:3、私は天にある霊的すべての祝福をいただいている幸いな者、幸せな者なんだ。刑務所の中で。刑務所がパウロの信仰告白にひざまずくわけです。私たちに襲い掛かってくるさまざまな現実が、それが人によるものなのか、環境によるものなのか、経済によるものなのか、健康によるものなのかわかりませんが、それが私の信仰告白の前でひざまずくようにさせなければなりません。それを信仰と言います。私たちはそれが十分に可能な祝福が許されているし、特権をいただいている者なのです。何かの訓練が必要なのかと思うかもしれませんが、訓練は別の次元の話であって、ただ信仰によってです。義人は信仰によって生きる。この宣言が堂々とできる人、私は刑務所の中であろうが、死の影の谷を歩こうが、幸いな者、幸せな者と宣言できて、現実に囚われることなくそこから飛び出すことができるときに、イエス様が最後におっしゃいました。祝福の契約のメッセージにたどり着くようになります。それが使徒 1:7-8 です。いまイスラエルの国はどうなるのでしょうか。自分の国が植民地なので、それは大きなテーマに違いありません。しかし、それに囚われることも現実に囚われることなのです。クリスチャンは、いま植民地であろうと関係ありません。キリストが内側に宿っていらっしゃる限り、それはあなたがたは知らなくてもいいです。それでその前を進むようになります。Only 聖霊が臨まれると、力を得て、エルサレムから地の果てにまで、イエスの証人となる。237 国 5000 未伝道種族、日本の 47 都道府県に救われていないまま滅びの運命の奴隷となって死んでいく魂がたくさん待っているのに、なぜクリスチャンのあなたがたのテーマは、何を食べるか、何を飲むか、何を着るかなどにあるのかというイエス様の訴えのようなそういう箇所なのです。これがクリスチャンなのです。もう一度言います。自分がどうのこうのにあまりデリケートに囚われることがないように。それはキリストの血と肉が自分のためという告白にまだまだ曖昧だからかもしれません。

まとめます。私たちはイエス様の流された血と引き裂かれたからだによって全く新しく造られた者だという確信と自負を持ちましょう。Ⅱコリント 5:17 には「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」。なぜこれが宣言できないのでしょうか。どのように新しくなったのでしょうか。滅びの運命から完璧に解放され、もう二度と罪に定められることがないのちと御霊の原理に移されている者なのです。しかも地上にいる間に復活のイエス様、勝利の万軍の主、イエス・キリストが、すべてを完了なさったイエス・キリストが私の内側に宿っておられる。そのような存在として新しく造られました。その確信と自負を持ちましょう。過去は終わりました。現実にも勝利できます。未来は希望として保証されています。それでこの確信を持って、だからこそこれからの生き方は今までと同様ではなくて、新しい生き方に間違いないということを考えて、それにチャレンジしていきましょう。ローマ 12:1 にはこう書いてあります。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」。これからは新しく造られた幸いな者なので、今までとは違うどのような生き方が求められ、また許されているのでしょうか。

その第一は無条件、感謝でスタートすることです。悲しいことがあっても感謝しますか。そうです。理不尽なことがあっても、濡れ衣を着せられても感謝するのですか。そうです。まだそこまで力が及ばない場合は、無条件感謝して、感謝の内容はあとあと探るようにしましょう。これは霊的な戦いなのです。なぜかという、すべてのことに神様が関与なさらないものは何一つありません。言葉を変えますと、キリスト・イエスを惜しまずに私たちのためにのために、罪人のために引き渡された方がなぜすべて良いものを与えることがないのでしょうか。私たちの理解が及ばないだけであって、クリスチャンに起こるすべては感謝なことなのです。そこを見つけるようにしないとイケません。そのためには生き方の習慣というものを変えていか

ないといけません。無条件、感謝します。腹立つことを言われました。その瞬間イライラするでしょうけれども、とにかくできるだけ早いうちに感謝します。そうでないと目に見えない闇の力に操られることとなります。今も虎視眈々、心配している者を狙っています。I ペテロ 5:8 に書いてあります。だから無条件、感謝でスタートし、それから伝道を中心にして人生を見るようにしましょう。私たちのレベルで良いこと、悪いこと、嬉しいこと、悲しいこと、いろいろあるでしょう。予想していた通り、あるいは予期せぬこと、さまざまなことがあります。全部が伝道のための神様の導きなのです。だからすべて伝道を中心にして見て行くように。これが新しい生き方です。なぜ皆さんが急に会社をクビになったのでしょうか。なぜあの会社に左右されたのでしょうか。なぜ引っ越しをするのでしょうか。なぜ結婚するのでしょうか。全部を伝道中心に見たときに正しい解釈ができるようになります。そうでないとまた二度三度繰り返し繰り返しさまようようになるしかありません。なぜそんなにもったいないことをするのでしょうか。これが新しい生き方なのです。

それから、すべてのことにおいて祈りを中心にして生きることです。つまり、自分の考えや意見や自分が先走るのではなくて、常に主を見上げ、神のみこころを求めることなのです。なぜかと言いますと、神のみこころのない事柄というものは一切ございません。無条件、感謝でスタートして、伝道の目ですべてを見て、祈りがその人の生活の中心となる。そのときにそれがどのような姿勢というか、生き方として現れるかという、すべてのことを譲ることになります。また受け入れることになります。しかし、囚われることなく全部超越して行くことになります。それから一つだけ、神のみこころを見つけて、それには挑戦して行くことになります。譲り、受け入れ、超越して、挑戦して行く。そのとき最後にみことばを体験するようになるでしょう。まず神の国と義を求めなさい。そうすれば、それらのすべては加えて与えられるということを経験するようになります。それを追い求めて手に入れるのではなくて、加えて与えられるという体験です。それで何を食べれば飲むかに縛られる、囚われることなく、神のみこころを福音宣教のために進んでいくようになるのではないのでしょうか。そうでないと全部テーマが何を食べるか飲むかになるしかありません。クリスチャンはそれをテーマに生きる者ではありません。無条件、感謝して、すべてを伝道の目で見ると全部感謝なのです。それで何か利害関係や何か対立する時には譲るのです。相手が悪いか良いか関係なく譲るわけです。それが力です。それで今現れるさまざまな状況を受け入れるように、それに引かからないように。そして、それに囚われることなく超越して行く。なぜなら神のみこころがあるからです。福音宣教という大命題があるわけですから。そのときに加えて与えられることを体験するわけです。本当の意味でサタンが震える勝利のクリスチャンとして堂々と残りの生涯を歩いていけるようになるでしょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。今日も兄弟姉妹とともに礼拝を捧げるこの幸いを感謝いたします。どうか神様のメッセージがひとりひとりの心に留まるように聖霊様が働いてください。内側の古きものが壊れて、神のみことばがしっかりと立てられるように聖霊様が豊かに働いてください。それで新しい被造物である確信と感謝と新しい生き方にこれから挑戦して行く祈りの信者としてひとりひとりを導いてください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン